研究報告３　杉谷Ａ遺跡出土鉄器の歴史的意義と方形周溝墓の築造動向

野垣　好史（埋蔵文化財センター 専門学芸員）
小黒　智久（富山市考古資料館 主幹学芸員）

はじめに

令和５年度、富山市考古資料館において民俗民芸村連携企画展「呉羽丘陵」の一環として、企画展「杉谷古墳群・杉谷Ａ遺跡の全貌～日本海文化論の現在～」が開催された。本展の開催を契機として、筆者らは本誌前号において杉谷Ａ遺跡出土鉄器のうち未報告の小形鉄器６点の報告を行った（野垣・小黒 2024）。この作業によって鉄器の様相がより明らかになったことを受け、本稿ではまず杉谷Ａ遺跡出土鉄器の歴史的意義について検討したい。

また、令和５年度に杉谷Ａ遺跡内で試掘調査が行われ、新たに方形周溝墓２基が検出された（堀内 2024）。この調査成果を踏まえつつ、杉谷Ａ遺跡の方形周溝墓群について、その形態と分布・時期との関係といった築造動向に関しても若干の検討を行いたい。文責は、それぞれの執筆部分の末尾に示した。（野垣・小黒）

１　出土鉄器からみた杉谷Ａ遺跡の歴史的意義

本遺跡では、昭和49年度の発掘調査で方形周溝墓17基、円形周溝墓１基、土壙２基が確認されており（富山市教委 1975）、方形周溝墓は溝の四隅を掘り残すＡ群と溝が全周するＢ群に大別される。さらに、Ａ群は近接する墓が溝を共有するＡ-Ⅰ類と共有しないＡ-Ⅱ類にわかれる。周溝墓群は盟主的な大型墓（周溝を含む一辺約11ｍ）と小型墓（同５～６ｍ）がある（富山市教委 1975，p.3）。周溝内でも埋葬が行われ、さまざまな墓が大きさの違いをもって存在し、杉谷古墳群が隣接することから、この地の集団は墓の形や規模に階層差が明示されていたことがわかる。

前稿によって、杉谷Ａ遺跡にもたらされた鉄器の概要が鮮明になった（表１）。大型墓に多く副葬されたことがわかる（図1）。小型墓からの出土例（副葬品）は、第２号方形周溝墓の素環頭鉄刀が唯一である（写真1）。同資料は、第３号方形周溝墓出土品と同型式で、墳丘規模の差からも、第３号方形周溝墓の被葬者から分与されたと判断するのが妥当だろう。それは、同被葬者、もしくは同被葬者の葬送儀礼執行者が小型工具を主体としつつも、本遺跡で最多となる鉄器副葬を実現できるほど、多くの鉄器を入手できたからこその判断である。

このほか、本遺跡では、鉄素材もしくはその可能性がある鉄片（廃鉄片）が目立つ点も重要である。本遺跡周辺の集落の様相が不明瞭のため、鍛冶工房などは明らかになっていないものの、鉄素材が副葬された方形周溝墓の被葬者は、始原的（村上 1998，pp.91-94、2001，pp.58-63）あるいはプリミティブ（松井 1999，p.260、2001，p.195）な鍛冶、すなわち棒状鉄器を叩き延ばし、鏨で切断して製品に加工する工程に従事する工人を掌握していた、または自ら従事していた可能性もあるのではなかろうか（小黒 2023a，p.101、2023b，p.36）。なお、弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉の打出遺跡では、始原的な鍛冶が実際に行われた可能性が高い。鉄鏃や切出形のナイフなどの小型品は十分に製作できる状況にあったと考えられる（小黒 2006，p.189、2009，p.277、2023a，pp.88-96、2024,p.11）。このような鉄器生産が杉谷Ａ遺跡周辺でも行われていた可能性が想定できるようになったことが、近年の調査研究成果と言えるだろう。

さて、本遺跡は第１・２号方形周溝墓出土土器の年代観から、月影式期に比定されてきた。両墓出土土器のうち、第２号方形周溝墓の方が若干新相を呈する可能性（富山市教委 1975，pp.7-9）が指摘され、古川知明氏（古川 1999，p.127）など近年の多くの研究でも報告資料を主たる根拠に月影Ⅱ式期との評価が通説化してきた。このようななか、髙橋浩二氏らはこれ

表 1　杉谷 A 遺跡出土金属製品一覧（野垣・小黒 2024 を一部改変）

出土遺構等	種　別	性　格	文献・備考
第 1 号方形周溝墓(主体部)	ヤリガンナ(鉄素材に転用か)	副葬品	小黒 2003
第 1 号方形周溝墓(南溝)	棒状鉄片(鉄素材か)	副葬品(主体部削平時の移動か)	野垣･小黒 2024
第 2 号方形周溝墓(主体部)	素環頭鉄刀	副葬品	素環刀Ⅳ式(豊島 2010)
第 3 号方形周溝墓(割竹形木棺)	素環頭鉄刀 鉄素材(板状鉄片が複数銹着) ヤリガンナ(鉄素材に転用か)	副葬品	素環刀Ⅳ式 林･佐々木 2001 野垣･小黒 2024
第 3 号方形周溝墓(南溝中層)	ヤリガンナ	副葬品(主体部削平時の移動か)	野垣･小黒 2024
第 3 号方形周溝墓	ヤリガンナか	副葬品か	野垣･小黒 2024
第 3 号方形周溝墓	方形板刃先か	副葬品か	野垣･小黒 2024
第 6 号方形周溝墓(周溝内の主体部か)	刀子か	副葬品か	野垣･小黒 2024
第 10 号方形周溝墓(割竹形木棺)	有茎三角形銅鏃	副葬品	
第 17 号方形周溝墓(箱形木棺)	短剣	副葬品	
第 17 号方形周溝墓	不明鉄器	副葬品か	野垣･小黒 2024

写真 1　第 2 号方形周溝墓の素環頭鉄刀出土状況

まで報告されていない土器の一部（大部分は細片）の実測調査報告（髙橋ほか 2022）を行った。第 3 号方形周溝墓は月影式期を中心としつつ、白江式期以降の可能性も示唆した。第 6 号方形周溝墓は白江式期から古府クルビ式期を前後する時期、すなわち第 1・2 号方形周溝墓よりも新しい時期であることを示した。第 10 号方形周溝墓は月影式期を中心に白江式期古相（漆町 5 群期）までの幅におさまり、月影Ⅰ式期を中心とする土器も含まれる。そして、第 12 号方形周溝墓は月影Ⅱ式期を中心に比定できると総括（pp. 89-90）した。

このような調査研究の進展により、月影Ⅱ式期に集中的な造墓活動が行われたとの理解が、必ずしもそうとは言えない可能性も生じてきたことに意義がある。もちろん、当該土器自体の時期比定はさておき、その出土層位の評価は別途行われる必要がある。それによって、各墓の時期を厳密に推定する必要があるからである。墓が密集する以上、葬送儀礼の執行／片付け後に墳丘上で放置された土器が周溝内に転落したり、墳丘の削平時などに破損したりすることは当然にありうるのであり、周溝内への埋没も時間差が生じうるのである。また、墓域として利用される以前に土地利用された際の混入品ほかの可能性もある。それゆえ、周溝の上層などから出土した土器片であれば、周溝底部付近から良好に遺存する土器との接合関係が認められるなどの状況証拠がなければ、時期比定の根拠資料として評価すべきではない。このような資料の点検は本稿でもできていないが、近年の評価よりも一段階遡る時期から古墳時代前期前葉に降るまでの時期幅で本遺跡の方形周溝墓群を捉える必要が明らかにされたことは重要な成果である。

本遺跡における鉄器副葬は、銅鏃の副葬とあわせ、月影Ⅱ式期には行われていた。最寄りの首長墓は杉谷 4 号墳（四隅突出型墳丘墓）で、同墓は出土土器から月影Ⅱ式期～白江式期（漆町 4～5 群期、古川 1999, p. 128）、白江式期を中心とする時期（髙橋 2019, p. 54）に比定されている。筆者自身は漆町 5 群期に比定してきた（小黒 2007 第 2 図、2009 表 2、2023a 図 47 など）が、この見解が的を射ているならば杉谷 4 号墳に先立って杉谷 A 遺跡第 1・2 号方形周溝墓に鉄器が副葬され、第 3 号方形周溝墓にも副葬されていた可能性がある。もちろ

ん、杉谷 4 号墳の被葬者の政治的／経済的活動時期や没年齢などとの関係から、方形周溝墓群との時期差が生じることはありうる。ただ、杉谷 A 遺跡の副葬品群の入手契機を考える際は、第 1・3 号方形周溝墓から北西約 100mの杉谷 4 号墳のほか、北西約 280mの杉谷 6 号墳（長方形墳丘墓、辺長約 50m）、北東約 560mの杉谷 8 号墳（方形墳丘墓、辺長約 35m）といった首長墓に着目する必要がある。先後関係はあるが、いずれもほぼ同様の時期と想定され、第 1 主体部陥没坑出土土器から杉谷 8 号墳が本古墳群形成の嚆矢と考えられる。杉谷 A 遺跡の周溝墓群は、各首長墓の被葬者の麾下にあった階層の集団墓と推定できる。素環頭鉄刀やガラス小玉など、首長層の交易によって入手した一部が首長層から与えられ、副葬されたと考えられる（小黒 2023a，p.101）のである。鉄器（素環頭鉄刀、織物に包まれたヤリガンナ欠損品など）やガラス小玉からみる限り、関係先の一つが越前である（小黒 2023a，pp.101-103、2023b，pp.34-38）。（小黒）

２　杉谷 A 遺跡における方形周溝墓の築造動向

杉谷 A 遺跡は、昭和 49 年度の発掘調査で方形周溝墓 17 基、円形周溝墓 1 基が確認されており、令和 5 年度、駐車場造成に伴い埋蔵文化財センターが試掘調査を実施したところ、新たに方形周溝墓 2 基を確認した（堀内 2024、以下、堀内報告とする）。試掘調査のため不確定な点を含むものの、この成果を踏まえ方形周溝墓の築造動向に関して若干の考察を行いたい。なお、表記の簡略化のため、以下では昭和 49 年度発掘調査を「S49 発掘」、令和 5 年度試掘調査を「R5 試掘」とする。また、方形周溝墓の形態分類は、前項 1 の冒頭に記した富山市教委 1975 に拠る。

R5 試掘の概要　堀内 2024 に拠りつつ、まず R5 試掘の概要を確認する。堀内報告は、紙幅の関係から詳細な説明は省略されているため、示された図を参照しつつ適宜補って記したい。試掘調査地点は S49 発掘地点の北西側、杉谷 4 号墳からみると南東側隣接地にあたる。900㎡を対象にした試掘調査で、5 本の試掘トレンチを掘削し、方形周溝墓とみられる周溝の一部のほか、溝、古代の焼壁土坑などを確認した。方形周溝墓は 2 基分の周溝があるとされている。S49 発掘で確認された方形周溝墓からの連番で、検出された 2 基を第 18・19 号方形周溝墓と呼称する。推定された復元状況は図 1 のとおりである。

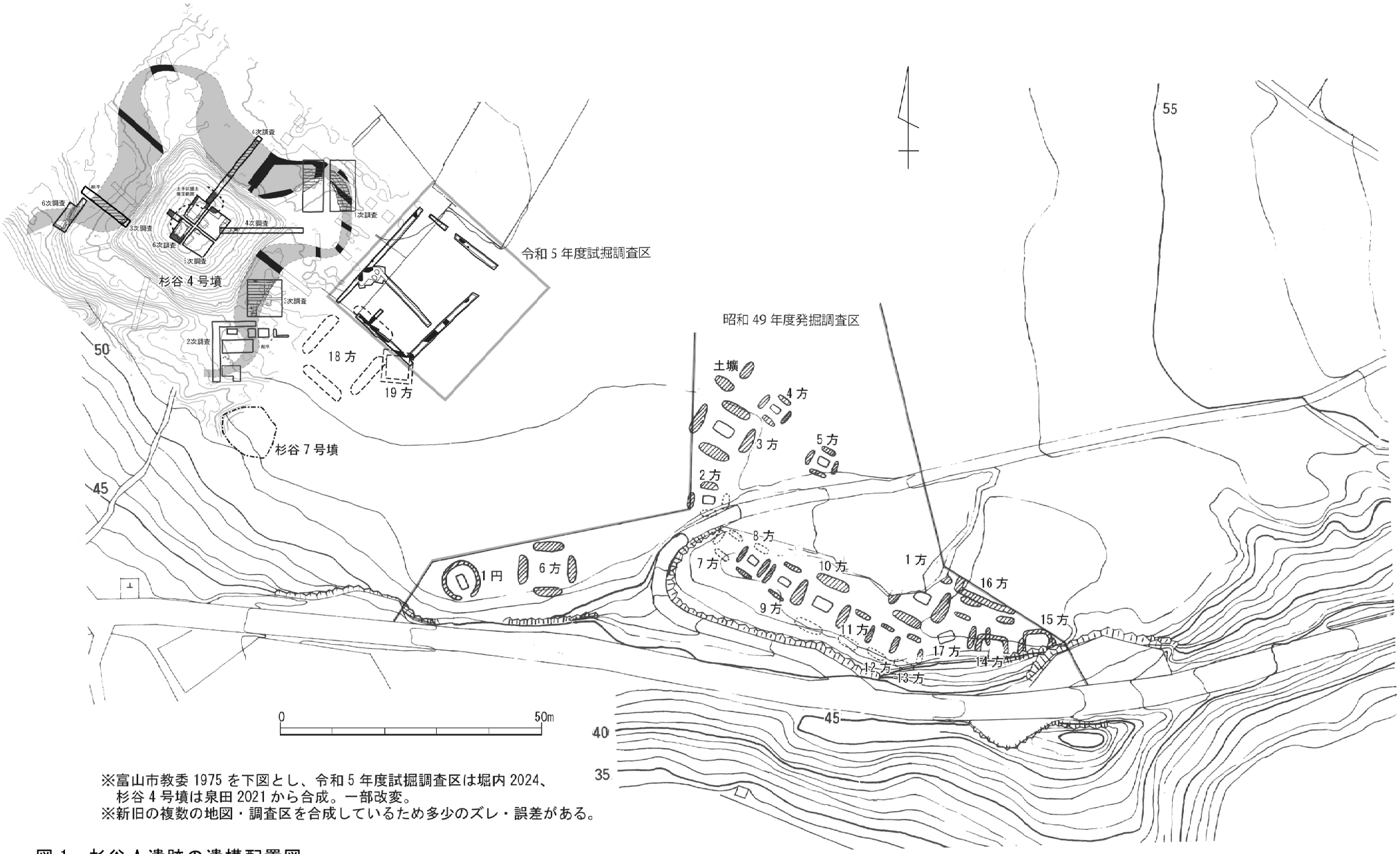
第 18 号方形周溝墓は、北東辺にあたる周溝の一部が確認され、周溝の検出長 7.6m、幅 2.0m、深さ 0.26mである。周溝の四隅を掘り残す A 群で、復元規模は、堀内報告によると本遺跡で大型の第 3・10 号方形周溝墓と同程度の 8.5～9m程度（規模は周溝内側下端を基準に計測。以下同）と推定されている。しかし、第 3 号方形周溝墓は周溝一辺の長さが 4.9～5.4m程度であり、周溝一辺の長さが 7.6m以上ある第 18 号方形周溝墓は、復元規模が 10mを超える可能性が高く、その場合は本遺跡最大規模となる。主軸方向はN-42°-Eである。

第 19 号方形周溝墓は、直角に曲がる周溝の隅角部が検出され、周溝が全周する B 群の可能性が高い。検出長 3.8m、幅 0.8m、深さ 0.4mである。堀内報告では、S49 発掘の B 群である第 14・15 号方形周溝墓とほぼ同規模と推定されている。主軸方向はN-11°-Eである。

第 18・19 号方形周溝墓は、重複関係にあることが明らかだが、試掘トレンチ内で遺構どうしの直接の切り合いは確認できていないため、新旧関係は不明である。また、部分的な遺構掘削しか行っていないため周溝から遺物は出土していない。なお、第 18 号方形周溝墓の周溝から約 20m北の溝からは月影Ⅱ式期の壺が出土している。

杉谷 A 遺跡方形周溝墓の築造動向　第 18・19 号方形周溝墓が検出された R5 試掘区と、第 1～17 号方形周溝墓が検出された S49 発掘区は、いずれも A 群と B 群の方形周溝墓が検出されているが、両調査区で共通する点が 2 つある。

一つは、両調査区とも A 群と B 群の方形周溝墓に重複関係が認められることである。R5 試掘区は上記したとおりで、S49 発掘区は東端部で 3 基検出されている B 群（第 14～16 号方形



※富山市教委 1975 を下図とし、令和 5 年度試掘調査区は堀内 2024、
杉谷 4 号墳は泉田 2021 から合成。一部改変。
※新旧の複数の地図・調査区を合成しているため多少のズレ・誤差がある。

図 1　杉谷 A 遺跡の遺構配置図

周溝墓）がA群と重複している。この新旧について、第15号方形周溝墓（B群）とA群の切り合いではA群の方が新しいとされており（富山市教委1975,p.7)、B群→A群の築造順が考えられる。既存のB群を壊してA群方形周溝墓が築造されたとみられる。また、両調査区のもう一つの共通点は、A群、B群それぞれの主軸方向の違いである。A群は四方位からみて斜めの軸を取るものが多いのに対し、B群は四方位に近い軸をとる。

杉谷A遺跡におけるA群とB群に関する上記2点の事実、すなわち両群が重複関係にあること、両群に主軸方向の違いがあることは、B群とA群の築造に大きな乖離があることを示唆している。A群の方形周溝墓どうしが、一部は周溝を共有しながら整然と築かれていることとは対照的である。A群とB群は、時期差と同時に築造主体の違いも想定できるかもしれない。なお、四隅突出型墳丘墓の杉谷4号墳は、第18号方形周溝墓と主軸が一致しており、A群方形周溝墓との関係が強い。

百塚住吉遺跡・百塚遺跡の方形周溝墓との比較　百塚住吉遺跡・百塚遺跡は、杉谷A遺跡から北東7.5㎞の呉羽丘陵の先端部に立地する。弥生時代後～終末期の方形周溝墓13基、円形周溝墓5基が、古墳と混在しつつ検出されており（富山市教委2009・2012)、その築造には、以下のとおり杉谷A遺跡との共通性がみられる。13基の方形周溝墓のうち、11基は周溝の四隅を掘り残す、あるいはその可能性が高いもの（以下、杉谷A遺跡に準じてA群と呼称)、その他2基は、周溝が全周するもの（同B群）と一辺の中央が途切れるもの（新たにC群とする）であるが、分布をみると、A群の11基は台地南側の標高が高い地点に集中して、ほぼ軸を揃えているのに対し､B･C群の2基は北側の標高の低い場所に離れて築かれている。この分布の違いは、杉谷A遺跡でみたA群・B群の違いと同様、A群とそれ以外（B・C群）の方形周溝墓が異なる背景をもって築かれたことを示している。

このことは時期を踏まえるとより鮮明になる。小黒2009・鹿島2012を参照して、時期が判明する方形周溝墓を整理すると、A群は、法仏Ⅰ・Ⅱ式期に20m程度の大型墓2基を含む一群が築かれ、その後月影Ⅰ式期は空白期となった後（註)、月影Ⅱ式期に再び6～12m程度の小～中型規模のものが築かれる。注意されるのは、A群が空白期となる月影Ⅰ式期を中心とする時期に、B・C群の2基が築かれたと推定されていることである。本遺跡では、単純にB群→A群という築造順序とはならない点は杉谷A遺跡と異なり、また時期不詳の方形周溝墓もあるため不確実な点は残すものの、現状で明らかに築造時期の傾向に違いがある点は、両群の差異を浮き彫りにする。

以上のとおりA群とそれ以外（B・C群）の方形周溝墓は、分布だけでなく時期に関しても排他的ともいえる様相をみせており、両者が一連の系譜の中で築造されたのではないことを強く示唆する。杉谷A遺跡と同様、単なる時期差ではない事柄に起因する可能性が高い。

円形周溝墓との関係　最後に円形周溝墓との関係を確認しておきたい。百塚住吉遺跡・百塚遺跡において円形周溝墓は、A群方形周溝墓と同じ分布域に重複なく築かれており、また時期が判明するものは、いずれもA群方形周溝墓と同じ月影Ⅱ式期に位置づけられる。言い換えるとA群方形周溝墓は、B群方形周溝墓よりも円形周溝墓と親縁性が高い状況が看て取れる。一方、円形周溝墓が1基確認されている杉谷A遺跡は、百塚遺跡ほど方形周溝墓との関係を明確にしにくいが、上記したA群方形周溝墓とB群方形周溝墓との違いに比べれば、分布状況から見る限りやはりA群との関係が強いように思われる。

呉羽丘陵の上記2地域に関しては、対比されることの多い方形周溝墓か円形周溝墓かという違いより、むしろ方形周溝墓どうしの違い、すなわちA群とそれ以外（B・C群）の方が、より根幹的な違いを反映しているのではないか。まだ明確な根拠はないもののその内容をあえて言及するなら、重複がない分布状況や主軸の一致から、A群方形周溝墓と円形周溝墓は同一集団による一連の系譜のなかで築かれたのに対し、B・C群方形周溝墓はそれらとはまた別の集団による築造が想定できるかもしれない。（野垣）

おわりに

本稿では、杉谷A遺跡出土鉄器の歴史的意義を検討し、また方形周溝墓の築造動向について粗い見通しを示した。杉谷A遺跡は、それ単独での重要性はもとより、周囲にある杉谷古墳群との関係を含め、富山平野の古墳出現期を探るうえできわめて重要な位置を占める。上記したような新たな調査や検討を重ねることで、当該期の様相がより鮮明になると考えられる。（野垣）

註　鹿島2012の編年表（p.274）では、月影Ⅰ式期の方形周溝墓として「百塚住吉SZ05」を挙げているが、これは報告書本文では「古墳」とされる。一方、古府クルビ式期の古墳として「百塚住吉 SZ06」が表記されているが、これは本文では「方形周溝墓」である。小黒2009にある百塚住吉SZ06の時期も考慮すれば両者は逆転して誤記されたことが明らかであり、月影Ⅰ式期になるのは本来、百塚住吉SZ06であろう。この百塚住吉SZ06は全周タイプ（B群）の方形周溝墓である。

引用・参考文献

小黒智久　2006「打出遺跡の弥生～古墳時代鉄器」『富山市打出遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

小黒智久　2007「平成 17 年度シンポジウム 北陸の古墳編年の再検討 越中における古墳編年」『阿尾島田古墳群の研究－日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究－』富山大学人文学部考古学研究室

小黒智久　2009「百塚住吉遺跡・百塚遺跡のいわゆる出現期古墳が提起する問題」『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

小黒智久　2023a『コシの古墳と地域社会』雄山閣

小黒智久　2023b「杉谷古墳群・杉谷A遺跡の全貌～日本海文化論の現在～」『富山市民俗民芸村連携企画展 呉羽丘陵』富山市民俗民芸村

小黒智久　2024『打出遺跡と弥生時代の鉄器づくり』陶芸館・考古資料館連携企画展「鉄を活かす人びと」Ⅱ 展示解説図録　富山市考古資料館

鹿島昌也　2012「総括」『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

泉田侑希　2021「遺跡速報 富山県富山市杉谷古墳群」『考古学ジャーナル』№756　ニューサインエス社

髙橋浩二　2019「杉谷4号墳出土土器の編年的位置づけ」『杉谷4号墳－第6次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室

髙橋浩二・小島布由美・関口美南・橋本すず・星野佑稀・松浦悠太・水島りさ子　2022「富山市杉谷A遺跡出土土器の実測調査とその評価」『大境』第41号　富山考古学会

富山市教育委員会　1975『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会　2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』

豊島直博　2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

野垣好史・小黒智久　2024「杉谷A遺跡出土鉄器について」『富山市の遺跡物語』№25　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

古川知明　1999「杉谷古墳群」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会

堀内大介　2024「新たな方形周溝墓を確認 杉谷A遺跡」『富山市の遺跡物語』№25　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

松井和幸　1999「竪穴住居跡出土鉄器について」『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』㈶広島県埋蔵文化財センター

松井和幸　2001『日本古代の鉄文化』雄山閣

村上恭通　1998『倭人と鉄の考古学』青木書店

村上恭通　2001「日本海沿岸地域における鉄の消費形態－弥生時代後期を中心として－」『古代文化』第53巻第4号　古代学協会

令和6年度 富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報

富山市の遺跡物語 №26

令和7（2025）年3月31日発行

編集・発行　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒939-2798 富山市婦中町速星754　婦中行政サービスセンター3階

TEL：076-465-2146　FAX：076-465-5032

Email：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印　　刷　有限会社ヤツオ印刷